

沖

8
2018

俳句雑誌[おき]



眠りたらぬ日

能村 研三

終刊号

身の中の気泡が抜ける夏至の夜

散水ホースすこし足らざる風知草

灯を消せば馴染み易きよ素手素足

髪に手をやりて茅の輪をくぐりけり

七月に入つて二冊の俳誌の終刊号が届いた。二月に亡くなつた金子兜太さんの「海程」と、かつて兜太さんも所属しておられた「寒雷」である。いずれも翌月から後継誌が発刊されるとのことであるが、俳壇に大きな影響力を与えた二誌であるので時代の流れとは言え寂しい思いである。

「寒雷」は昭和十五年に加藤楸郎が発刊、以来七十八年楸郎の思いを継ぎ雑誌を発行しつづけた。

沖が創刊から何年間もお世話になつていた印刷所が「寒雷」と一緒であつた。生まれたばかりの小さな雑誌とかたや大結社では比べようもなかつた。

Webで閲覧できる「増殖する歳時記」で、かつて今井聖さんが昭和十七年の「寒雷」三月号の二句欄にあつた登四郎の句を抽出して鑑賞している。

寒雀瓦斯の火ひとつひとつ点きぬ
卒業期もつとも遠き雲の朱

登四郎が市川学園に赴任したばかりの頃で、母と結婚した歳である。今井さんによれば同じ号には森澄雄さんも二句欄

父の日は酔の効きすぎしものを食ふ

形代のなめらかすぎて頼りなき

海鳴りに簀戸素通しの蜃ぐらし

眠りたらぬ日十葉を刈り進む

合併市のはづれのはづれ蛇泳ぐ

筆まめで口まめで蜜豆が好き

に名を連ねていたことも記されていたのが興味深い。

もう一つ「寒雷」の思い出として残っているのは、昨年十二月に亡くなった中島秀子さんのことである。

プールサイドの鋭利な彼に近づきゆく

秀子

中島さんは「寒雷」に所属しながらも「沖」の創刊に参加してくれた人で、我が家に訪ねて来られた時は楳郷先生のことをよくお話ししていた。

「寒雷」は終刊号が奇しくも九百号記念号となった。

「寒雷」も「海程」も一誌一代の清さはあるもののさびしいことである。

日本海

朴の一花

森岡 正作

朴咲けり筋美しき森の雨
森翳る朴の一花の突き抜けて
初鰓歯に衣着せぬ者ばかり
青梅雨の夜は厚肉と赤ワイン
尼寺の主になりたる墓
墓嚙み付きもせず火も噴かず
この道を行くも行かぬも青嵐

青田の美しい季節となった。私の所は広い狭いに拘わらず、各家が一枚ずつとなっていて、近くで見ると稲の伸びや、それに伴う色具合も微妙に違う。鴨の番が餌を漁り、何れ鴨の子も見られるだろう。今年は白鷺はもちろんだが、青鷺の番が来て散歩する人を喜ばせている。また目高を追う親子の姿も目立つようになった。

青田の遠景がまた素晴らしい。車窓から見ていると、他の景と相俟って飽きない。登四郎先生には「日本海青田千枚の裾あらふ」という名句がある。旅先の輪島で棚田を見に行った時のもので、青田が日本海に傾れる景を、日本海が千枚の青田の「裾あらふ」と詠み切った。実に見事である。青田の広がりには心を豊かに、平穏にしてくれる。

蒼茫集



武田菱

楠原幹子

本籍地

辻美奈子

竹とんぼ五月の風をつかみをり
木道の足裏にやさし遠郭公
はにかみの産毛うすうすゆすらうめ
緑さす畳のへりの武田菱
寺町の夕さり明かり額の花
* 緑蔭を出づれば影のついて来る

花巻は 栗原公子

* 風を呼ぶ八十八夜の大櫨
風五月胸中の帆を高く上げ
見晴るかす花巻の空夏つばめ
早苗田に雨うるはしき花巻は
旅の夜のうたた寝に聴く河鹿笛
句碑かこむ孫弟子あまた花は実
花巻自性院

* 麦こがし用なきものに本籍地

待ち合はす母の日母の友達と
牛蛙夜ともちがふ闇に鳴く
青梅雨のけさ踝の尖りかな
思春期やえご散るころを鬱々と
時の日のふるさと行きの切符かな

石畳 吉田政江

山藤の昇りつめたる陸奥の空
川霧の峡這ひ上り朴の花
* 蚕豆の莢どれを剥いても過保護

石畳灼けレールの先にある明治
横浜港吟行
青葉潮がらんと風の大棧橋
荒南風やながすくぢらの腹の線

羅馬へ

千田百里

「沖の水脈」は中啓の水尾登四郎忌

横浜路行三句

羅馬へも行ける 棧橋風薫る

水尾引かず夏百日を氷川丸

登四郎忌過ぐベイブリッジは海霧の中

お洒落してめまとひに付き纏はるる

* なんぢやもんぢややひらがなでものおもひ

愉悦

大畑善昭

雲中の山へ竹の子採りにゆく

犬と少年青野の風となり駆くる

* 草取りも愉悦の一つけふも取る

その声に眩しき目覚め初郭公

蛇いかに鳴く神に声もらへれば

稀に出る裏庭泰山木の花

うろたへる

宮内とし子

* 噴水の限界水のうろたへる

槍・穂高見えて夏呼ぶ方位盤

水底を知ることのなき水すまし

あやめ咲く水でばかせる水彩画

水音の遠のくあたり桐の花

黒ビール魔女といはれし人も老ゆ

黒潮

能美昌二郎

* 黒潮は大きく蛇行鯉来る

筍のまだ濡れてゐる重さかな

人の立つやうに木の立つ安居かな

人は皆海向く夏の波止場かな

一湾の涼引き上ぐる大錨

南吹く日本丸はビルの陰

夏 帽 子

林 昭 太 郎

* バイオリン顎にひやりと走り梅雨
紫陽花の雨滴はらひて立ち直る
星涼しグラスに泡の囁けば
貝釦ひとつ外せば風薫る
峰雲や体育館に竹刀鳴り
夏帽子小さき夏帽引き連れて

ベ ン チ

高 木 嘉 久

切通し抜けて植田の眩しかり
ゆつくりと剥がす五月のカレンダー
猫車納屋に還りて芒種かな
* F Mに切替へ緑蔭のベンチ
廃屋を毀つ青葉の重さかな
十葉の領域確と真夜の庭

旅するホテル

福 島

茂

蟻遊ぶだあれもぬない滑り台
妻からの犬飼ふ話新茶汲む
大川はいつもの流れ三社祭
客船は旅するホテル大南風
* 学校の名のつく通り更衣
父の日の当たりさはりのなき話

響動もす

秋 葉 雅 治

一碗に泳ぐきぬ・めん冷奴
響動もして茅屋たたく男梅雨
甚平や男盛りの短くて
夏掛の軽さに馴染み末期ふと
町内は少子高齢花火の夜
* 論争を好む美丈夫喜雨亭忌

潮鳴集



真つ平ら

齊藤 實

サーファアの双手翼となる一瞬
青鷺の立ち尽したる水鏡
半夏雨昼間につける書斎の灯
メロン切るいま満月の真つ平ら
夏館大理石より冷氣あり

鷗のやうに

大沢美智子

帆走は鷗のやうに五月来る
初夏や帆なき帆柱天を衝き
みなとみらいの空へ一文字夏燕
操舵手の背中越しなる青葉潮
天心に触れ泰山木のけさ一花

線 審

石崎和夫

線審のフラッグ高く夏来る
ペーロンの女声の高し横浜港
鰻の日創業嘉永の藍暖簾
弓の師は昼職人青葉風
雲海や馬の背越えを点動き

背を正す

佐久間由子

畦ふさぐ八十八夜の猫車
植田はや風の青さの安房郡
麦秋や暮れても青き海の空
白菖蒲活けて八十路の背を正す
短夜の水のはたらく音すなり

僅 か 菊 地 光 子

仏頭のごとき木の瘤半夏雨
ライトアップして噴水に夜の貌
* 枝豆やひと日になせること僅か
栗の花空にかけたるパラフィン紙
薔薇真紅明治の遺構たたふかに

花は葉に 阿部眞佐朗

神事の矢放ち濁世の夏祓ふ
* 来し方の踊り場いくつ花は葉に
茅屋の闇に十葉浮いて浮いて
群れなして木々の高みに夏の蝶
出湯の香鼻腔にかよふ籐寝椅子

ジャンクション 佐々木よし子

麦秋や軒先に古る酒林
羅の手庇で坂のぼりくる
* ジャンクションに一閃二閃夏つばめ
緑（俗吟行句）さす 葵の紋の鬼瓦
万緑に跳ねて鯨のモニュメント

交響詩モルダウ 井原美鳥

卓に薔薇モデルハウスの円居の間
* 交響詩モルダウ苺煮えて来し
瀬音きく涼しさ淡水魚の図鑑
履き出しの鼻緒てこはき夜店かな
積乱雲育つ砂風呂に寝ね居れば

英世像 須賀ゆかり

* 吊橋を押し上ぐ山の青葉かな
軒先に味噌売る嫗余花明り
灯さるる夏炉の艶や合掌家
試験管を緑へかざす英世像
「考える人」の筋肉夏きざす

詩のやうに 内山花葉

* 早池峰の薫風に据ゑ先師句碑
水河期より白帆を立てて水芭蕉
光太郎の山畑詩のやうに緑雨
日本丸の帆綱弦なす青嵐
椰子の実でみがく甲板朝ぐもり

飛鷹選評



能村 研三

八十八夜ひとく母の農日誌 伊藤よし江

八十八夜は立春から数えて八十八日目、毎年五月二日頃がこの日に当たり、「八十八夜の別れ霜」といわれるように、この頃から霜が降りなくなり、日に日に夏めいてくる。八十八を組み合わせる「米」という字にもなり、農家では稲の種まきや、茶摘みが始まる目安とされていた。農業を営む方も昔と今ではそのやり方も大きく違っているようだが、母が几帳面に書き綴った農日誌は栽培記録や出荷記録、種を蒔く時期など事細かに記されていて、農業を引き継いでいく身には有難く、母の頃の農業の大変さが偲ばれた。

離れゆくを追はず憾まず鳳仙花 大久保志遠

鳳仙花は東南アジア原産で赤、白、紫、絞りなどの花を咲かす。女の子がこの花びらの汁で爪を染めて遊んだところから「爪紅」ともいう。又、熟した種子を指でつまんではいけるのを楽しむ。花言葉が「私に触れないでください」と言うそうだが、この句も二句一章の句として鑑賞すれば、その花言葉が符合する。「去るものは追わず」ということわざがあるが、その潔い心もちを一句にした。

天をつく禾の弾力麦は穂に 大橋 松枝

大橋さんが住まわれる埼玉県北部は麦畑が大きく広がる。麦は冬に種を蒔くと四月頃には青々とした穂が出、五六月には黄褐色に熟れて、夏の新緑の中に黄熟した麦畑は鮮やかである。成熟すると穂から麦粒がはずれ、粒は細く小さく、風で遠くへ飛ばされるように長く大きな禾もっている。風に吹かれて揺らぐ麦の禾は、天をつくようだと言われ表現され力強い。

栗咲くや音楽室の肖像画 仲里 貞義

昔、小中学校の音楽室にはバツハやハイドン、ベートーベンなどの著名な音楽家の肖像画が掲げられていた。「こんな人」が「こんな音楽」という絵と音をセットでイメージ体験させるためなのだろう。音楽室の窓際からはバツハやハイドンのくるくるのカール頭のような粟の花がたわわになっているのが見えた。

野あやめの屹立としてあたりけり 稗田 寿明

あやめは、水はけのよい草原に自生していて、紫色の花びらをつける。園芸化を目的に改良され、観賞用に植えられているのが、花菖蒲。あやめは野性に育ちながらも屹立した紫色の優美な花をまつすぐな茎に凛と咲かせて、高貴な品格あるたたずまいを見せる。

ボート漕ぐ発止と櫂は日を返す 下村たつゑ

レガッタなど数人が連なるボート競技であろうか。一人一人が胸を張り、肩甲骨を引き寄せてボートを漕ぐ動作は見えても気持がよい。腕と櫂が翼と化して水面に映る日を返し、水面を羽ばたいているように見える。「〈以下略〉」

沖作品



能村研三選

* 八十八夜ひととく母の農日誌

千葉

伊藤よし江

貞義

明易のむらさきの富士灘越しに
麦秋の入日地球をひと色に
ベイブリッジ五月の空へ弦を張り
綴ぢ紐の切れし戦記に父の夏
離れゆくを追はず憾^{うら}まず鳳仙花

愛知

大久保志遼

千葉

稗田寿明

* 仏法僧聞く家康の産湯井戸
鬼の裔継ぎけむ峽の星祭
川音に昏るる吉野の釣瓶鮎
夏雲の空押し開く登四郎忌
煤色の五玉そろばん青葉光

埼玉

大橋松枝

下村たつゑ

* 天をつく禾の弾力麦は穂に
日時計の重りは小石やまぼふし
句会果て壺の紅花やや乾ぶ

* 十葉の鏤めらるる雨あがり
銜ひなく素朴に雨の著莪の花
栗咲くや音楽室の肖像画
朝採りを自慢しあうて夏の空
絡みつく昼顔に艶ありにけり
軽トラで回る八十八夜かな
夏蝶の触れゆくものの揺れにけり
十代の部下のひとつ麦の風
袖まくり袖また戻す夕薄暑
野あやめの屹立としてゐたりけり
一途さの穢れを知らぬ春の滝
ポート漕ぐ発止と櫂は日を返す
検診車のひとつ出口や若葉風
あたらしき鍵薫風のすつと抜け
鎮もれる石の日時計皐月雨